

日本における訳語「地政学」の 定着過程に関する試論・補遺

柴田 陽一*

Yoichi SHIBATA

A Supplement to Generalization of the Translated Word “Chiseigaku” of German Word “Geopolitik”

I はじめに

地政学という言葉をよく目にするようになってから、もう数年が経った。新聞やインターネットのニュースでは、今も変わらず「地政学(的)リスク」という表現がたびたび使われている。また、NDL-ONLINEの情報によると、地政学をタイトルに含む本が2016年の一年間で29冊、2017年にも27冊が出版されたことが分かる。これらの冊数は2014年の9冊、2015年の11冊と比べても圧倒的に多いし、さらに戦前のピークである1942年の16冊と比べても倍近い数である。2018年は少し減少したが、18冊と依然として多い(表1)。

このように、少なくとも数の上では、空前の地政学ブームが起きていると言ってもよいが、にもかかわらず、日本人一般の地政学に対する理解はそれほど深まっているようには思えない。『スパイクマン地政学』の訳者である渡邊(2017:1)が指摘するように、「いわば、多くの日本人が「地政学」に魅了されながらも、実は沙漠の中の蜃気楼のような、実体のない「地政学」という幻覚に惑わされている」と言わざるを得ない状況である。

そればかりか、この状況は学界にも当てはまると筆者は考える。地理学界を例に取ろう。「学界展望(2016年1月～12月)」の「総説」で、人文地理学会編集常任理事(編集委員長)の香川貴志は次のように述べる。

地理学は社会の動きを極めて敏感に反映する学問である〔中略〕我われ地理学に携わる者の多くは、地域研究や政治地理学における地政学への注目を知っている。そしていわゆる知識人が唱える論壇地政学のまなざし、保護主義社会が地政学的リスクを高めるといふ社会一般のまなざし、これらが地理学研究者のそれとは微妙に違うことにも気付いている。そして、地理学研究者は、かつて翼賛的な政策に地理学が地政学を以って加担したという苦々しい過去のことも熟知している。さりながら、改めて地政学を説明する段になると、多くの地理学研究者が自信を持って語れないのも事実であろう(香川 2017: 304)。

このように、地政学を「苦々しい過去」、あるいは別の箇所述べるように「社会の潮流に乗り過ぎて失敗を犯してしまった忌々しい過去」(香川 2017: 305)と理解している地理学者は多い。しかし、問題なのは、「過去」を「熟知している」と言いながら、なぜ「翼賛的な政策」に「加担」し、なぜ「社会の潮流に乗り過ぎ」たのかを、ひいてはそもそも地政学それ自体を、ほとんどどの地理学者が「語れない」ことである。

こうした中途半端な形での過去の理解は、戦前の地政学の苦い経験により、戦後の地理学者が政治にかかわることを忌避してきたとする言説を生み出した。例えば、次のようなものである。

表1 「地政学」をタイトルに含む本(2000年以降)

2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年
2冊	2冊	1冊	6冊	7冊	5冊	4冊	3冊	4冊	2冊
2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	
5冊	5冊	3冊	2冊	9冊	11冊	29冊	27冊	16冊	

NDL-ONLINE (かつてのNDL-OPAC) の情報に基づく。

* 摂南大学外国語学部

人文地理学者も個人的には、多種多様な政策研究に携わってきている。しかし、それは地理学界として、人文地理学を全面に打ち出しているの関わり方ではなかった。〔中略〕こうした事態に至ったのは、第二次世界大戦中の地政学の苦い歴史が尾を引いている(戸所 2000: 315)。

地政学が戦中、戦後にもたらしたさまざまな問題があり、その後、政治的なインシューに関することはあまり触れるなどという風潮が生まれた(秋山 2005: 97. 小森星児の発言)。

こうした言説は、探せば他にもいくつでも見つかるはずである。けれども、「苦い歴史」と書くのはたやすいが、いったいどれほど中身を知っているのだろうか。やはりその点が問われるべきであろう。

これに関して、最近筆者は驚くべき例に接した。それは2018年2月に日本地理学会(当時の会長は戸所隆)常任理事会で承認された「新ビジョン(中期目標)」における次の一節である。

わが国の地理学は、第2次世界大戦において軍事関連研究に意図せず巻き込まれたという不幸な歴史をもっている〔中略〕会員の研究成果が戦争目的の研究に応用される可能性があることを自覚して研究を推進する大切さは、過去の苦い経験が示唆するところである。地理学の研究において、間接的ながら、地理情報科学、気象・気候学、地形学、立地分析、地域研究、地政学などの成果は、研究者の意図を離れ、軍事・戦争目的に転用される可能性を否定できない(日本地理学会 2018: 3-4)。

この一節で示されている「意図せずに巻き込まれた」という認識は問題とされなければならない。もちろん全ての地理学者というわけではないが、地理学的方法論的反省から、あるいは学問としての地位向上などを目的として、戦前に地政学研究へと意図的に突き進んだ地理学者がいたことは、拙著『帝国日本と地政学』(柴田 2016)を含めた研究で明らかにされているからである。それにもかかわらず、このような認識が示されている以上、少なくとも地理学界にとっては、戦前の地政学はいまなおアクチュアルな問題だと言わざるを得ないのである。

では、「いわゆる知識人が唱える論壇地政学」(香川 2017: 304)の世界では、戦前日本の地政学に対してどのような認識が示されているのだろうか。例えば、元駐ロシア外交官の佐藤優は次のように述べる。

戦後の地理学は、地史〔地誌か一筆者注、以下同様〕、自然地理と人文地理を混ぜてカクテルにしている。だから半分は氷河期の話とか、地球のマントルの動きとか、植生とか、どちらかという地学で扱うテーマが主です。それと各国事情がどうなっているかということばかり〔中略〕これは戦前の日本の地理学が、ほとんど地政学だったことに対する反動です。地政学はナチスの公認イデオロギーでした。日本でもさまざまな地政学派があったし、京都学派は非常に地政学的な考え方をしていました。それに対する反動から、「地政学というのは戦争に直結している学問なので扱わないほうがいい」と封印してしまった。だから現在のわれわれは地政学がよくわからなくなってしまったんです(佐藤 2016: 97-98)。

佐藤の語り全体が全て間違いだというわけではない。しかしながら、カクテルのくだりや、「戦前の日本の地理学が、ほとんど地政学だった」という箇所は明らかに事実誤認であろう。最近出版された他の地政学書を見ても、戦前日本における地政学についてはほとんど言及されていないのが実情である。

以上のような状況に鑑みるなら、地政学が戦前の日本でなぜ受容され、支持され、どのような役割を果たしたのかを解明することが急務となる。そういう考えのもとで、筆者は『帝国日本と地政学』(柴田 2016)を執筆・出版したものの、その中で解明することができたのは、本国と植民地から成る「帝国日本」という空間的視野から見た戦前日本の地政学像にすぎなかった。取り上げた対象も、本国の事例として京都帝国大学の小牧実繁(1898-1990年、1922年京都帝国大学文学部史学科卒業)を中心とする「日本地政学」グループ、植民地の事例としては「満洲国」の地政学にとどまった。

また、関連する事項として、戦前の地政学関連文献の収集・整理を行った結果、「地政学」「地政治学」「地理政治(学)」「地政論」「ゲオポリティク」をタイトルに含む著作が、大小合わせて約660点も存在することが判明した。それに「政治地理」をタイトルに含む著作や、タイトルに地政学や政治地理学を含まなくとも関連すると判断できる著作を合わせると、資料総数は1800点近くに達した。こうした資料を用いた拙論「日本における訳語「地政学」の定着過程に関する試論」(柴田 2017, 以下前稿)は、時間に制約され、1930年代以降を十分に扱うことができなかった。本稿はその欠を補うために起こしたものである。

訳語の変遷に注目するのは、どの訳語を用いるか

(訳語の選択)は、単なる好尚にとどまらず、それぞれの論者がゲオポリティクをどのように考えているかと密接にかかわる重要な問題であるからである。より具体的に言えば、ゲオポリティクを政治学(国家学)に属するものとするか、それとも地理学に属するものとするかという問題と無関係ではない。そのため、訳語の選択は、主として地理学者と政治学者の間で見られた綱引き、あるいは逆に押し付け合いとも言えるべき攻防を物語るものだとも言えるのである。

本論に入る前に、前稿の内容を簡単に振り返っておこう。筆者はまず、1920年代までの欧米諸国におけるゲオポリティクの動向(ラッツェル、チェレン、ハウスホーファーを中心に)を、日本語訳の出版状況と合わせて確認した。その結果、1940年代に翻訳されるゲオポリティクの主要な文献が、実は1920年代までにはほぼ出揃っていたことが判明した。次に、これまで言われてきた1920年代半ばではなく、実は第一次世界大戦期にチェレンの翻訳を通じて、日本にゲオポリティクが紹介されていたことを指摘した。さらに、1920年代の日本におけるゲオポリティクを受容を、地理学の制度化と関連づけて論じた。制度化されたばかりの日本の地理学は、自らのレーゾンデートルを示すためにも、ドイツで注目を浴びていたゲオポリティクを積極的に取り入れようとした。ところが、科学性に疑問が残るゲオポリティクを地理学の一部とみなす地理学者は、「地理政治学を約めたもの」(飯本 1925: 856)として「地政学」という訳語を初めて提唱した東京高等女子師範学校の飯本信之(1895-1989年、1922年東京帝国大学理学部地理学科卒業)ぐらいであった。

前稿の最後では、1930年代以降についても少し言及し、「1941年末から1942年初頭という時期に至って、ゲオポリティクの訳語として「地政学」が定着したと見てよい」(柴田 2017: 167)という見解を示した。現在でもその見解に変わりはないが、以下では、1930年代に訳語をめぐるどのような議論が展開されたのか(II)、1940年代のどのタイミングで訳語が定着し、さらにその後どのような議論が続けられていたのか(III)を明らかにしてみたい。

II 1930年代の議論——学問的性質と帰属をめぐる

1920年代には、上述の飯本は別として、論者の多くはゲオポリティクを政治学の一部とみなしてい

た。例えば、地理学者である小川琢治(1870-1941年、1896年帝国大学理科大学地質学科卒業)は、当初はゲオポリティクに「地政策」という訳語を当て、政治学ではなく政治地理学であると捉えていた(小川 1924)が、後に考えを改めた。1928年の論文(小川 1928: 242)では、ゲオポリティクは「地政治学」又は「地政策論」と訳すべきものであり、「新たに興つた政治学の分科名」であると述べている。

こうした見方が大勢を占める状況は、1930年代に至っても変わらなかった。例えば、阿部市五郎(1897-1988年)は1933年11月の『地政治学入門』の中で次のように述べている。

地政治学はどこまでも政治学特に国家学にその籍を有すべきものにして、政治地理学の如く、地理学にその地位を要求すべきものではない。夫れ故に、われわれはGeopolitikの邦訳にあつても、折角飯本〔信之〕学士の創始にかゝり、今日に於てはかなり一般的にわが地理学界に於て使用されてゐる地政学なる名称を避けて特に地政治学なる文字を選び斯学が政治学の一学科なることをその学名に於て既に明かにすることを企てたのであつて、漫然と無意味に地政治学なる文字を使用するのではない(阿部 1933a: 20)。

ゲオポリティクを政治学の一部と考える阿部が、地理学界において「かなり一般的に」使用されている「地政学」を退け、敢えて「地政治学」という「政治」の二文字が入った訳語を提案したことが分かる。『地政治学入門』はゲオポリティクをメインタイトルに用いた日本初の著作である。ただし、「地政学」という三文字にこだわれば、1940年の小牧実繁『日本地政学宣言』(小牧 1940)が初発ということになる。

阿部は東京帝国大学理学部や京都帝国大学文学部などの地理学講座の卒業生ではない。1924年に京都帝国大学経済学部を卒業し、東京市社会局での勤務を経て、『地政治学入門』出版当時は成城高等学校講師として人文地理学や経済学などを教えていた。別の学問領域から地理学に参入してきた人物である。

それ以降1940年代になっても、阿部は「地政学」ではなく、頑なに「地政治学」という訳語を使い続けるが、1933年1月に出版された、アレキサンドル・ズーパン著『政治地理学綱要』の訳書では、次のように述べ、訳語に迷いを見せていたことも付言しておきたい。

ドイツ語のGeopolitikを地理学者たる小川〔琢治〕博

士は地政治学又は地政策論と訳すべきものとせられ、また石橋〔五郎〕博士や飯本〔信之〕学士は地政治学と訳され、更に政治学者たる今中次麿教授は地理的政治政策と訳してをられる。私は従来仮りに地政治学といふ訳に従つてゐる。而して将来此訳語を改めるかも知れない(阿部 1933b: 5)。

訳語「地政治学」が地理学界において「かなり一般的」に使用されているという阿部の認識は、おそらく訳語を創出した飯本に加えて、京都帝国大学文学部地理学講座の第二代教授(初代は小川琢治)である石橋五郎(1876-1946年、1901年東京帝国大学文科大学史学科卒業)が使用していたことに基づくものであろう。しかし、実際は、この時期の地理学界においては、まだ「地政治学」という訳語が定着したとは言い難い状況にあった。さらに、地理学界以外においても、同様の状況であったことは後述するとおりである。

続いて、同時期の政治学者たちの見解を見ておこう。早稲田大学の吉村正(1900-1984年、1924年早稲田大学政治学科卒業)は、1933年6月の論文「ゲオポリティークの起源、発達及本質」の中で次のように述べ、阿部と同じくゲオポリティークを政治学に属するものと捉え、「即地政治学」という訳語を提唱した。

ゲオポリティークGeopolitikは、我が国の地理学者によつて地政治学と訳されてゐる。しかし私はこの訳語を以つて必ずしも適当なものと考えない。何んとなれば地政治学の三字から受ける吾々の印象は、その後に種々の概念を与へしめ、一定の明確な概念を端的に表現しないからである。また我が国に於て、地政治学なる語が一般に普及された定訳となつてゐるといふでもない。従つて私はこゝに、地政治学なる訳語を捨て、むしろ原語を発音のまゝ用ふるに如かずと考へた。元來Geopolitikなる語の前綴Geoはギリシヤ語のGaia(土地に即す)から来たものであり、Politikは政治の技術をも含んだ広義の政治学の意味であるから、強いて訳せば、「即地政治学」とも言ふを至当と考へる(吉村 1933: 120)。

このように述べた吉村であるが、その後は自らが提唱した「即地政治学」という訳語を用いることはなく、1940年代になると、「地政治学」や「地政治学」を用いている(吉村 1941, 1942)。

中央大学の川原次吉郎(1896-1959年、1922年東京帝国大学法学部政治学科卒業)も、阿部や吉村と同じくゲオポリティークを政治学に属するものと考えていた。川原は1934年8月の論文「ゲオポリティークの概念」の中で次のように述べている。

ゲオポリティークは勿論政治学中の一分科である。私はかつて政治学の分類を試みたとき政治地理学をその中に入れたことがあるが、今はこれを改めて地理学殊に人文地理学に譲り、新にゲオポリティークを政治学中に編入しなければならないと思つてをる(川原 1934: 87)。

「かつて政治学の分類を試みた」というのは、著書『政治学序説』(川原 1927)のことである。川原は神川彦松(1889-1988年)、今中次麿(1893-1980年)、蠟山政道(1895-1980年)、堀真琴(1898-1980)、奥平武彦(1900-1943年)らと同じく、東京帝国大学法学部政治学科で小野塚喜平次(1871-1944年)や吉野作造(1878-1933年)の下で政治史を学んだ。小野塚・吉野の影響を受けた弟子が次々とゲオポリティークに惹かれていく現象は、小野塚のラッツェル受容に始まる地政治学的思考の系譜が存在していたことを示すものである。この地理学とは別の文脈で展開した政治学における地政治学受容史については、春名(2015)が参考になる。

ところで、川原はゲオポリティークの訳語については次のように述べ、強いて訳すならば「地理政治学」であるが、普通は原語のまま表現するという態度を表明した。

ゲオポリティークを阿部〔市五郎〕氏は「地政治学」と訳してをられる。飯本〔信之〕氏は「地政治学」、川西〔正鑑〕氏は「地理政治学」と各人各様である。私は強いて必要のときは「地理政治学」と訳することにしてをるが、普通はフォーゲル教授やロゼンスキー博士の意見に従つて、「ゲオポリティーク」とそのまゝ表現することにしてをる(川原 1934: 88)。

1940年代になつても、川原は「地政治学の籍は地理学の中にあらずして、政治学の中にある」(川原 1944: 76)と述べ、ゲオポリティークが政治学に属するという考えを維持しているが、訳語に関しては「地政治学」を用いるようになった。

次は、ゲオポリティークを地理学の一部である、あるいは密接にかかわる学問であると主張していた論者の見解を見ておきたい。京都帝国大学の石橋五郎は、1930年10月の論文「政治地理学と地政治学」の中で次のように述べている。

地政治学と雖も決して地理学と全く分離したる学問ではない。チエレンが云つた如く寧ろ両者の合同せるものである。故に政治学者が地政治学者たり得る

と共に地理学者も亦地政学者たり得るものである。或は時としては余りに政策に捉はるゝ政治学者の地政学よりも、恒久の事象により大観する地理学者の方が地政学上の卓見を出し得ることがある。英国の地理学者マツキンダー教授が1904年に発表した地政学の論文『歴史の地理的要軸』(Geographical Pivot of History)が世界大戦を予言し適中せる如きは其の著例の一つであらう(石橋 1930: 54)。

この一節から読み取れるように、石橋はゲオポリティクを地理学と密接にかかわる学問と捉え、政治学者と比べて地理学者がゲオポリティクを研究する際のアドバンテージを強調している。さらに石橋は次のように述べ、地理学者がゲオポリティク研究をより一層進めるべきことを提唱した。

地理学は実用より発して成りし科学である。殊に政治地理学の如きは其の実用的価値の甚だ大なるものである。地政学に至りては更に一層實際的である。而かも今や科学としての地位を十分に獲得しつつあるのである。〔中略〕吾人は我が国地理学者が此の旧き象牙の塔より出で、政治地理学や地政学に向ひ、一は以て此等の科学的研究を盛ならしめ、一は以て實際上に於ける国運に貢献せられんことを望みて止まざるものである(石橋 1930: 54)。

1920年代からゲオポリティクを地理学の一部とみなしていた飯本信之は、1935年の著書『政治地理学研究』の中で次のように述べている。

地政学は、独逸に於いて地政学者を以て自ら任ずる人々〔ハウスホーフアーやマウルら〕の此の語に対して与へてゐる意味では、地理学の本来の領域に属しないものであることは既に述べた如くである。けれども、と云つて地理学者が無関心で居ることの出来ない学問である。〔中略〕苟も地政学が一の科学として成立せんがためには、それは当然政治地理学及び地誌学(地方的地理学)を基礎とせねばならぬのみならず、人文地理学の対象とする人文的諸般の問題をも取扱ふものであるからである(飯本 1935: 20)。

この一節から分かるのは、飯本の中でゲオポリティクを地理学の一部とする主張が、以前よりもトーンダウンしていることである。1928年の論文で飯本は、「理論上はいざ知らず、又将来の事は別として、現在の所では、地政学は兎に角政治地理学によつて生まれて来たものとして、一般地理学の建物の中に其の位置を認めて置かねばならぬであらう」

(飯本 1928: 95)と述べていた。ところが、1930年代の著書では、「無関心で居ることの出来ない学問」と述べるにとどまっているのである。

ただし、「地政学」という訳語については、自身が論文タイトルに用いたり(飯本 1925)、後続の論文や本でその沿革や概念を解説したり(飯本 1928, 1929)したことにより、「地政学」なる訳語が一般に用ひられるやうになつた(飯本 1935: 13)と、自信をのぞかせている。

最後に、1930年代に訳語という点で特異な位置を占めているのは、倫理学者の和辻哲郎(1889-1960)である。和辻は1935年9月に出版した『風土』の第5章第4節「ヘーゲル以後の風土学」の中で、ゲオポリティクを「国土学」や「領土政策」と訳した。これまでの研究では余り注目されていないようであるが、実はかなり本質を突いたゲオポリティク理解であったと言つてよいだろう。

チェルレンが現実にて於て拍車をかけたのは国土学(Geopolitik)の運動であつた。1928年『国土学雑誌』(Zeitschrift für Geopolitik)が創設せられたときの宣言はこの運動の傾向を明かに示してゐる。〔中略〕これによつても明らかなやうにGeopolitikは国土学であるよりも寧ろ『領土政策』ひいては殖民政策に近いのである(和辻 1935: 404-405)。

ところで、1940年10月の『思想』第221号は、「国土の問題」という特集を組み、小原敬士(1903-1972年、1929年東京商科大学卒業)、江澤譲爾(1907-1975年、1930年東京商科大学卒業)、飯塚浩二(1906-1970年、1930年東京帝国大学経済学経済学科卒業)らによる5本の論文を掲載した。そもそも1921年に創刊された同誌は和辻が中心となって編集したものであるし、「83号(29年4月)で、和辻哲郎・谷川徹三・林達夫の三人が編集する新しい体制で再刊号を発足させます。この体制が〔中略〕273号(46年3・4月号まで)続きます」(佐藤ほか 2007: 7)とあるように、1940年当時も和辻は編集にコミットしていた。第221号の「編輯後記」には、「ゲオポリティクのテーマを採り上げるアクチュアルな意味についてはいくら強調してもしすぎるといふことはないであらう」とのコメントがある。第220号の「編輯後記」の中で「ゲオポリティクの諸問題」という特集名を予告したにもかかわらず、結局「国土の問題」とした背景には、かつて「国土学」という訳語を用いた和辻の意向があつたのではないだろうか。

III 1940年代前半の議論——訳語「地政学」の定着とその後の議論

1940年代になると、かつての飯本と同じく、地理学者のなかにゲオポリティクを地理学の一部であると積極的に主張する者が現れた。その代表例が京都帝国大学の小牧実繁である。1940年10月の著書『日本地政学宣言』(小牧 1940)の中で、小牧は「地政学」という言葉をゲオポリティクの訳語としても用いているが、同時に「吾々の新日本地理学」「日本当来の地理学」のことを「日本地政学」と呼び、「独逸地政学」との差異を強調した。彼の考えによると、これから目指すべき日本独自のゲオポリティクは、あくまで新しい地理学なのである。

ここに、かつては政治学の一部とみなされてきたゲオポリティクを、地理学の一部というより、新しい地理学そのものとして捉え直そうとする意図を読みとることができるだろう。この背景には、戦時体制の中で、かつて批判していたゲオポリティクの政策学としての側面に、地理学者たちが地理学の実践性を見出したことがある。言い換えれば、戦時体制に役立つと考えられたゲオポリティクを地理学だと主張することにより、地理学者たちは自らのレーゾンドートルを示そうとしたのである。小牧は1942年10月の著書『日本地政学』の中で次のように述べている。

地理と歴史と、歴史と地理と一如の学の研究に立脚し、而も日本国家最高の政治に資せらるべき実学なる以上、それは寧ろ日本地理歴史政治学乃至は日本歴史地理政治学乃至は政策学とても称せらるべきであるが、今は仮に日本地政学の名を以て足れりとしていいであらう。〔中略〕それは従来の意味に於ける所謂政策学であるのでは勿論なく、政策学なるの故に却つて高次の学であり、実践性を有することその事によつて最も価値ある学であり、実践的価値の高さの故に、その科学的研究は一層真理に徹せざるべからず、又徹し得る如き性

格を有する学であるとも言ふべきものなのである(小牧 1942: 19-21)。

ところで、小牧の『日本地政学宣言』は「地政学」という三文字をメインタイトルに用いたという点、帝大教授というネームバリューのある人物が執筆したという点、計5つの版が出版され一般に広く流布したという点でインパクトのあるものだったと考えられるが、1940年から1941年の時点では、「地政学」という訳語が定着したとはまだ言い難い状況であった。

その理由としては、まず、ハウスホーファーの名著*Geopolitik des Pazifischen Ozeans*第三版(1938年)が、『太平洋地政治学』をタイトルとして1940年8月と11月に上下巻に分けて出版されていた。翻訳を手がけた日本青年外交協会研究部(訳者は服田彰三)は、「訳序」の中で次のように述べ、「地政治学」を訳語として選んだ理由を説明している。

訳書の題名を「太平洋地政治学」と決定するまでには種々の調査と検討を経てゐる。“Geopolitik”の訳語には他に「地理政治学」、「地理的政治学」等々あるやうであるが、原著者の立場と所説を研究した結果、われわれは「地政治学」を採用することに一決したのである(日本青年外交協会研究部 1940: iv)。

次に、1941年2月から8月にかけて、科学主義工業社から計6冊出版されたチェレンやハウスホーファーらの翻訳書では、全てのタイトルに「地政治学」が用いられた(表2)。訳者は経済学者や翻訳家などであり、生粋の地理学者はいない。訳語に「地政治学」を選んだ理由については説明が見られない(チェレン 1941)が、1930年代からこの訳語を使い続けてきた阿部市五郎の影響が大きいと考えられる。

さらに、1941年3月の『地理学』第9巻第3号、同年9月の『科学ペン』第6巻第9号はともに特集名に「地政

表2 科学主義工業社の「地政治学叢書」

刊行年月	著者	訳者	タイトル
1941年2月	チェレン	阿部市五郎	地政治学論
1941年2月	ハウスホーファーほか	玉城肇	地政治学の基礎理論
1941年5月	メルツ	田間耕一	海洋地政治学：民族と制海権
1941年6月	シュトイエ	渡邊義晴	アウタルキーと地政治学：ドイツ封鎖経済論
1941年7月	ヴィールスビツキ	井汲越次	東南アジア地政治学：白色・赤色・黄色間の将来の戦場
1941年8月	マッシンほか	米澤卓司	アメリカ地政治学

治学」という訳語を用いていた。ただし、『地理学』は掲載した論文5本のうち、タイトルに「地政治学」を用いたのはわずかに1本のみ(阿部市五郎)であり、他の3本(江澤讓爾と金生喜造。金生は翻訳と論文1本ずつ)は「地政学」を用いていた(残り1本は予備役の軍人による西南太平洋の軍事的解説であり、ゲオポリティクには言及していない)。『科学ペン』も掲載した論文6本のうち、タイトルに「地政治学」を用いたのは2本(阿部市五郎と国松久弥)、「地政学」を用いたのは2本(小牧実繁と江澤讓爾)と同数であった。ゲオポリティクの訳語をタイトルに用いなかった残り2本も、本文中の訳語を見ると、「地政治学」(田間耕一)と「地政学」(金生喜造)に分かれていた。このように、両誌とも特集名に「地政治学」を用いながらも、掲載論文の中では「地政学」と「地政治学」という訳語が入り交じる混沌とした状態になっていた。

以上の点から見れば、1940年から1941年の時点においては、やはり「地政学」という訳語が定着したとはまだ言えないことが理解できるだろう。1941年に10月に出版された和歌山高等商業学校の米倉二郎(1909-2002年、1931年京都帝国大学文学部史学科卒業)の著書『東亜地政学序説』の次の記述も、このことを裏付けるものと思われる。

地政学の名を冠する所以は「地は政の本なり」とする管子（みづ）に職由し、地を画く従来の地理学を超えて、地を政むる具体的実践的理論としての地理学を意図するにある。それは指導理念は異なるも、独逸のゲオポリティクに近い内容を持つべきであるから、その訳語として一般に用ひられつゝある地政学にも通ずる所である(米倉 1941: 1)。

さて、その後1941年11月に東京で日本地政学協会が設立され、翌年1月に月刊誌『地政学』が創刊された(1944年11月まで刊行)。協会は1942年8月に東京帝国大学法学部講堂で「地政学講習会」を開催し、その講演録を1943年6月に『地政学論集』(日本地政学協会1943)として出版した。会長は海軍中将の上田良武(1878-1957年)であったが、実質的なトップは訳語「地政学」の考案者である常務理事の飯本信之であった。1942年2月にはハウスホーファー著、太平洋協会編訳『太平洋地政学』が出版された。Geopolitik des Pazifischen Ozeans第三版の3種類の翻訳のうち、最も広く読まれたものである。

協会や雑誌、代表的な著作の名称に「地政学」という訳語が使われたことにより、1942年以降に「地政治学」など他の訳語を用いることは極端に少なく

なった。「地政学」「地政治学」などゲオポリティクの訳語をタイトルに含む文献数は、1941年が約130点であるのに対し、1942年は約270点と倍増している。にもかかわらず、「地政治学」をタイトルに用いた文献数は、40点から8点へと激減しているのである。ちなみに、1943年に至っては2点、1944年と1945年は0点である。

このように、1941年末から1942年前半にかけての時期に、ゲオポリティクの訳語として「地政学」が定着したと見てよいであろう。ちょうどこの時期の「訳語」に関する認識をうかがい知ることができるのが、1942年2月に陸軍経理学校の岩田孝三(1907-1994年、1933年東京文理科大学地学科地理学専攻卒業)が出版した『地政学』における次の一節である。

我が国では最近、何々地政学又は地政治学と名づけられる各種の刊行物が夥しく氾濫して居るのが目につく。勿論「地政学」も「地政治学」も共に独逸のGeopolitikの訳語で全く同じものなのである。即ち“Geo”“地”と“Politik”“政治”又は“政策”とが組合はされたもので、従つて地政学又は地政治学といふ訳名となつたのである。或は人により「地理政策学」とも「即地政治学」とも云つて居るが、何と云つても前二者の方が簡明であり、穏当でもあり、一般によく膾炙されて居る(岩田 1942: 3)。

また、1942年3月に東洋大学専門部の川西正鑑(1897年- ?、1925年日本大学高等専攻科商科修了)が出版した『東亜地政学の構想』では、「地政治学」よりも「地政学」の方がマイナーであるかのような、やや異なる認識が示されている。

地政学(“Geopolitik”)は「地理政治学」「地理的政治学」、「地政学」,「地政策学」等と訳されてをり、この内、現在では「地政治学」と云ふのが多く使用されてゐるやうであるが、我々はその学問的性格の政策学的側面の強いのに鑑み、特に「地政学」を採用する(川西 1942a: 8)。

1941年には「地政治学」という訳語を用いた文献が多かったため、川西がこのように認識するのも無理はない。それよりも、この一節のみでは川西が「地政学」という訳語を採用した意図が分かりづらい。これについては、次に示す1941年11月の「東亜新秩序研究会」開催の講演録を見れば納得できるだろう。

地政学とはドイツのゲオ・ポリティークを訳した

ものであります。ハウスホーファー辺りの地政学を「地政治学」斯様に訳してをります。この訳し方が決して穏当を欠いてゐるといふやうなことを申すのではありませんが、私が聊か考へてをります処のゲオ・ポリティークは地政治学ではなく地政学と訳することが最も適当であると思ふのであります。即ちポリティークは政治学と訳して悪いといふ理由はありません。然しながらこの地政学は政治学といふよりも寧ろ政策学なのである、即ち地政策学である、地理の政策、地理政策学、国土政策、さういふ地政策学であります。そこでこのゲオ・ポリティークを地政策学と訳してもよいのであります。少し長過ぎますから、私は一応「地政学」斯様に考へて置いたらよからうと思ふのであります(川西 1942b: 5-6)。

もつとも、その後直ちに「地政学」という訳語が完全な定着を見たわけではない。文部省図書監修官の渡辺光(1904-1984年、1928年東京帝国大学理学部地理学科卒業)は、1942年10月の論文「地政学の内容に就いて」の中で次のように述べている。

因に標題に採つた「地政学」は必しも決定した名称ではなく、我が国では地政治学、地理的政策論、ゲオポリティーク等と云ふ名称も行はれてゐるが、此処では便宜上最も古くから用ひられてゐる結果、最も広く行はれてゐる名称たる「地政学」を採用することにする(渡辺 1942: 3)。

訳語「地政学」が最も広く用いられているとの認識はあるものの、「決定した名称」と考えられていたわけでもないのである。続けて渡辺は、ゲオポリティークはかつて学問的次元にあったが次第に変容し、現在の「実体は純然たる政策論」(渡辺 1942: 13)である。言い換えれば、現在のゲオポリティークは「地理学の断面より見たる政策樹立、並に指導原理の倫理化の手段」であるとし、それを教育界に導入したり、地理学と置き換えようとしたりする動きに対して強い違和感を表明した(渡辺 1942: 13)。

実は、一見「地政学」という訳語が定着しかけたかに思えた1942年頃から、ゲオポリティークを「地政学」と訳すことに疑問を持ち、新たに「地政論」という訳語を提唱する動きが現れた。1941年3月に東京帝国大学理学部副手の木内信蔵(1910-1993年)はホイットルサーの著書に対する書評の中で次のように述べ、ゲオポリティークを「地理学の一つの現はれ、応用としての地政論」と捉えるべきだと主張している。

全篇円満な常識を以て終始するのであるが、地政学に対しては、激しい忿懣の情を洩してゐる。何故に地政学がいけないかと云ふ理論的な詳しい説明はないのであるが、要するにそれは、特定の国家の為に地理学を利用し、ドグマの形式に迄発展させた所の感情論であり、自己の政治的要求を一方的に正当付けようとするから不可であると言ふ。〔中略〕一体、Geopolitikを訳語地政学そのまゝに、普遍性を持つ科学として扱ふから疑問が起るので、地理学の一つの現はれ、応用としての地政論と考へるならば、或は今一步譲つて、己れとは別の世界観も亦成立し得るとの理解と寛容さを持つならば、原著者が示す様な激しい抗議も大半は水解するのではなからうか(木内 1941: 228-229)。

小樽高等商業学校の横田弘之(生没年不明)も、1942年7月の論文「地政学の発展と其方向」の中で次のように述べている。

所謂ゲオポリテック(Geopolitik)が、地政治学、地政学、地的政策学、地理政治学及び地理政策学として我が国に紹介されたのは、極く最近のことに属するが、一説によると、未だそのものが「学」としての体系を持つや否や甚だ疑問なる所より、地政学として断定し得ず、寧ろ技術的意義を有するKundeとして、地政論又は地理政策論等となすのが適切であるとなして居る(横田 1942: 9)。

このようにゲオポリテックを一種の技術論(Kunstlehre)と捉える見方は、ハウスホーファーらが1928年に打ち出した有名なゲオポリテックの基本テーゼ(阿部 1932: 470)に由来する。そのため、以前から多くの論者により何度も紹介されてきた、木内や横田が、それを「地政論」や「地理政策論」という新たな訳語の提唱へと結びつけた点が注目される。

さらに、東京商科大学の佐藤弘(1897-1962年、1922年に東京帝国大学理学部地理学科を卒業)も1944年11月の論文「大東亜地政論」の中で、「地政学の言葉であるが、これは地理政治政策といった方がいゝやうで、「学」の字をつけるのは不適當のやうに思ふ。それは今日地政学は「学」としての体系をもつてゐないからである」(佐藤 1944: 237)と述べ、「地政学」の「学」の字に対する違和感を表明した。

訳語「地政学」に対して別の形で疑問を呈する論者もいた。中央大学や東亜同文書院大学に勤めていた政治学者である大木隆造(生没年不明)は、1941年11月の著書『政策学』の中で次のように述べている。

訳語に就いて末梢的な問題を取り上げるのではないが、ゲオポリティクを地政学と表現することに筆者は賛成できない。夫れはもとより政治学と考へたりまた斯かるものを予想してはならないのである。夫れは政策学であるからである。地理的局面上に政治、経済、文化を實踐すべき政策の学的表現である。地理(ゲオ)と称するものは政策の空間的限定であり、また政策(ポリティク)とあるは地理現象の問題化された形を意味するのである。筆者はこれを「地理政策学」と叫びたいと思ふ(大木 1941: 229-230)。

ゲオポリティクは政策学であるから、政治学を連想させる「地政学」という訳語ではなく「地理政策学」がふさわしいというのである。この大木の見解とは異なり、ゲオポリティクを政治学の一部とみなす蠟山政道も、1941年4月の論文「ゲオポリティーク」の中で次のように述べ、「地政学」という訳語はゲオポリティクが地理学ではなく政治学の一部である証拠だと論じていた。

ゲオポリティーク (Geopolitik) は我国の一部では地政学と訳されてゐる新しい科学であつて歐洲に於ても大戦以後に発展したものである。地政学と訳されてゐるのは政治地理学 (Politische Geographic) と區別せんが為めであつて、ゲオポリティークが地理学の一部門であるよりはむしろ政治学の一部門若しくは一方法である証左なのである (蠟山 1941: 101)。

ところが、大木や蠟山の見解とは異なり、「地政学」という訳語は多くの場合、ゲオポリティクを地理学の一部とみなす地理学者たちにより、「地理政治学」の短縮形として用いられていたことは上述したとおりである。

さて、その後の大木は1944年2月の論文「ゲオポリティク及地理哲学への構想」の中で次のように述べ、「地理政策学」の他に「国土政策学」という訳語を提案した。

現今専ら地政学なる訳語に於いて呼ばれてゐるもの、夫れはゲオポリティクの謂である。或は又斯かる表現の意図と軌を同じくして、地政治学、地理政治学なる訳語も取扱はれてゐる。併し夫れは如何なる名辞にも拘らず総て訳語である。唯その訳語と雖も未だ表現の不統一は免れて居ない。否、単に訳語に於ける統一性の欠如のみならず、斯学ゲオポリティクそのものの性格把握に於て極めて曖昧且多義を孕み、我々は斯学本来の特性とその

自己発展的な意図とに鑑みて遺憾に耐へないと思ふ。〔中略〕私共はゲオポリティクを地政学若しくは地政治学と訳出し之を使用することに一応賛意を拒否する。私共は之を斯学が果たしてゐる最も近代的な質的轉換の事情の下に偏へに地理或は国土政策学として名辞を与へたいと思ふ (大木 1944a: 246)。

さらに注目されるのは、ゲオポリティクが当初地理学界で「重要且緊急な課題」として取り上げられ、「地理学自体の方法論的打開と実践的活路」を求める方向で発展してきたものの、本来は「ポリティクの強調に於て成立してゐるもの」であり、今後はその方向で探究されるべきだとの見解が表明されていることである。

吾が邦の学界に於けるゲオポリティクへの関心は未だ十年の歳月を出ては居ないであらう。〔中略〕ゲオポリティクはその名辞表現に於いて二種類或は二様の概念の接合より成つてゐる。即ち一は国土或は地理の概念であり他は政治或は政策の概念である。この關係に於いてゲオポリティクの研究がそのいづれの面に重点づけられたかと云へば、吾が学界の斯学研究の出発は特に顕著に且真摯にその国土概念、地理概念の面にあつたことと思ふ。即ち当初に於けるゲオポリティクは吾が邦地理学界の重要且緊急な課題の一として取上げられ、當時に於ける地理学自体の方法論的打開と実践的活路の方向に伴ひ行かれて、一応は其処で培養されるに到つた次第である。従つて其処では先づ第一義的に地理学自体に対するゲオポリティクの果たし得る可き役割が考究せられた。即ち斯学はポリティクへの検討或は吟味に重点を置かれずして、専らゲオ即ち国土或は地理の解釈学的価値拡充に牽き行かれたのである。然し乍ら斯学こそは寧ろポリティクの強調に於て成立してゐるものではなからうか。私共は斯学が徒らに地理学の方法論に墮して行く傾向を憂慮すると共に、斯かる側面觀を克服してそのポリティクの面に斯学の精神と性格とを探索せんことを希望するものである (大木 1944a: 247)。

このように主張する大木が提唱したのが、「民族に於ける——広き意味に於ける人類生存過程の——時間的法則学として歴史哲学の可能性を容認すべきと俱に、地空間が同様に考究せらるべき学」である「地理哲学」という新たな学問であつた (大木 1944a: 249)。その構想をまとめた1944年6月の著書『地理哲学への構想』でも、大木はゲオポリティクを「地理政

策学」と呼び、「所謂政策を行ふと云ふ、実践的な意図に対する論理方式の科学」であることを強調した。

ゲオポリティク、その意義は地政治学或は地政学なる訳語に於いて表明せられてゐる。唯併し今日と雖も斯かる訳語的な理解が正当でありや否やに關しては、猶大方の判断を得てゐるわけではない。之は所謂訳語であるために、一般の斯学に対する解釈は任意に行はれてゐる観がある。斯学は未だ学としての主体性に乏しい。然し斯かる理由もその訳語的な取扱ひに対する、自己批判と自己構成とが十分でないからであらう。吾々は地政学と称する訳語に対して、直ちに賛意を表し得ない。寧ろゲオポリティクの意義を窺ふ時、斯学が真に要求する方向に応じて、之を地政学とはせずに地理政策学として呼び、従来学たらむと欲する政策理論に対してその基礎学として理解したいと思ふ、かくて又之は論理的な体系化に重点が置かれてゐる科学ではなくして、所謂政策を行ふと云ふ、実践的な意図に対する論理方式の科学となるであらう(大木 1944b: 31-32)。

大木の所説から分かるのは、1930年代後半からの10年間に限って見た場合、ゲオポリティクはまず地理学の方法論的革新や実践性への希求から地理学界で取り上げられたが、1944年ともなると別の側面に焦点を当てた議論が行われつつあったことである。ゲオポリティクは地理学だけではなく、政策学との関連で議論される新たな段階に入ろうとしていたのである。

若干異なるニュアンスではあるが、江澤讓爾が1944年11月の論文「地政学の現況」の中で次のように述べていることも、このことを裏付けるものと思われる。

旧秩序を支持してゐたところの思想を批判し、新秩序の意義を基礎づけるための観点を提供する上で、地政学が寄与してゐるところは尠少ではない。〔中略〕この新しい学問の本質が一般の人々にとつて正しく把握されるには、なほ、多少の年月を必要とするであらう。〔中略〕ドイツ及び日本で地政学が漸く「流行」の域を脱してチミチな方向を執りつゝあることは確かである。これを一層理論的に掘り下げて行かうといふ傾向が現れてゐるのである(江澤 1944: 19)。

「地政学」「地政治学」などゲオポリティクの訳語をタイトルを含む文献数は、1940年は約30点、1941年が約130点、1942年は約270点、1943年は約120点、

1944年は約40点、1945年は6点と推移している。したがって、江澤の言うように、1944年にはゲオポリティクがようやく流行、あるいは熱狂の域を抜け出し、理論的掘り下げが志向される新たな段階に至ろうとしていたことが分かるだろう。

以上のように、ゲオポリティクを地理学の一部とみなす見方が広まり、「地政学」という訳語が数の上では定着したと見られる1942年以降においても、ゲオポリティクという訳語についても、またその学問的性質についても、なお議論の余地は少なからず残されており、むしろ一層盛んであったと言えなくもない状況であった。特にゲオポリティクが一種の技術論であり、「学」としての主体性に乏しいとの考えから、「地政学」や「地政治学」ではなく、「地政論」と訳すべしとのという見解が表明されていたことは注目してよいだろう。ゲオポリティクを「地政学」として「普遍性を持つ科学として扱ふから疑問が起る」という木内の鋭い指摘(木内 1941: 229)は、的を射たものであった。

ただ、いずれにせよ、そうした議論が行われる時間はもうわずかしか残されていなかった。

IV おわりに

以上、IIとIIIで検討してきたように、どの訳語を用いるか(訳語の選択)は、学問的帰属をはじめとするゲオポリティクの学問的性質をめぐる議論と密接にかかわっていた。それは図1のように整理できるだろう。

ゲオポリティクを地理学の一部とみなす論者は、「地理政治学」の短縮形として「地政学」という訳語を好んで用いた。一方、ゲオポリティクを政治学の一部とみなす論者は、「地政治学」を用いる傾向が顕著であった。共通して指摘できるのは、「地理」や「政治」の二字を訳語に入れることにより、ゲオポリティクがどちらの学問分野に帰属するものかを明示しようとしたことである。ここに、主に地理学者と政治学者(経済学者を加えてもよい)との間で繰り広げられたゲオポリティクをめぐる綱引き、あるいは逆に押し付け合いとても言うべき攻防を看取することができるだろう。

訳語の変遷について整理すると、次のとおりである。1930年代前半は、ゲオポリティクをめぐる議論は学問的性質に関するものが中心であった。訳語は「地政学」と「地政治学」という二つの訳語がメジャーになっていたものの、どちらかが圧倒的な支持を得

論者	学問の帰属	訳語
地理学者	地理学	地政学 (←地理政治学), 地政策 (論)
	↕	地政治学, 地理政治論
政治学者 経済学者	地理学	地理政治学
	↕	地政治学, 即地政治学, 地理的政治政策, 地理政治学, 地文政治学, 地理政策学, 国土政策学, 地政学
その他		政治地理, 地理的政治, 地理的政治論, 風土政治学, 国土学など

図1 ゲオポリティクの訳語

ているわけではなかった。他に「即地政治学」や「国土学」などのユニークな訳語も提案されていた。

日中戦争から太平洋戦争へと向かう時期になると、地理学者たちがかつて批判していたゲオポリティクに大きな可能性を見出すようになった。ゲオポリティクの実践的側面が戦時体制に役立つと考えられたからである。1940年の地理学者小牧実繁による『日本地政学宣言』、1941年の日本地政学協会の設立(地理学者である飯本信之が常務理事を務めた)、1942年の『地政学』の創刊と続く流れの中で、ゲオポリティクをめぐる議論の主導権を握ったのは地理学者であった。彼らはゲオポリティクを地理学の一部として、あるいは極端な場合は地理学そのもの、新しい地理学として大いにその価値をアピールした。「地政学」という訳語はこの流れの中で定着したと言えるだろう。ちょうど1941年末から1942年前半にかけての時期である。逆に、「地政治学」は1941年を境にほとんど使われなくなった。

ところが、「地政学」が定着したかに思えた1942年以降も、訳語や学問的性質をめぐる議論が絶えることはなかった。ゲオポリティクを一種の技術論、あるいは政策学とみなす考えは古くからあったが、この時期にはそれが「地政論」という訳語の提唱となって現れた。ゲオポリティクは通常の学問とは異なり応用的性質を持っているが、それを「学」として認定することに対する違和感とその背景にある。また、1941年から1943年にかけての熱狂が過ぎ去った1944年には、ゲオポリティクをめぐる議論を一層深化させようとする動きさえも確認できるのである。

敗戦後まもない1948年の論文「科学としての地政学の将来」の中で、蠟山政道は次のように述べた。——「地政学それ自身が絶対的に一つの科学として独立としていると考えてはならない」(蠟山 1948: 6)。けれども、地政学(ゲオポリティク)は「すべてが誤謬と虚偽とに充ちた無価値なもの」ではなく、「政治地理学と共に或る限定した意義と価値」を有し

ている(蠟山 1948: 4)と、まさに関係者が公職追放処分などの憂き目にあい、戦時中の流行現象としてゲオポリティクを弊履のごとく捨て去ろうとする動きが大勢を占めていた中で、蠟山はきわめて冷静に斯学の来し方行く末を見つめていた。

しかし、その後ゲオポリティクはタブー視され、蠟山のような意見は背景に押しやられていく。それだけではなく、本稿で論じてきた戦前の訳語や学問的性質に関する議論もすっかり忘れ去られた後、ゲオポリティクは1970年代後半に「地政学」として「復活」することになったのである。

付記

本稿の骨子は2017年人文地理学会大会および日本国際政治学会2018年度研究大会で口頭発表した。なお、研究の遂行にあたっては、平成29年度科学研究費補助金基盤研究(B)「場所・物質・人の関係性に注目した知の形成に関する地理学史研究」(研究代表者: 福田珠己, 課題番号17H02430)の一部を使用した。

文献

- 秋山道雄 2005. (大会特別研究発表要旨) 伊藤達也: 環境問題への地理学的アプローチ——研究と実践. 人文地理57: 94-99.
- 阿部市五郎 1932. 抄訳 地政治学概念の史的発展に就いて(下). 地理教育15: 467-470.
- 阿部市五郎 1933a. 『地政治学入門』古今書院.
- 阿部市五郎 1933b. 訳者の序文. ズーバン, A. (阿部市五郎訳) 『政治地理学綱要』1-6. 古今書院.
- 飯本信之 1925. 人種争闘の事実と地政学的考察(1). 地理学評論1: 852-873.
- 飯本信之 1928. 所謂地政学概念. 地理学評論4: 76-99.
- 飯本信之 1929. 『政治地理学』改造社.

- 飯本信之 1935. 『政治地理学研究 上巻』中興館.
- 石橋五郎 1930. 政治地理学と地政学. 地学雑誌500: 51-54.
- 岩田孝三 1942. 『地政学(朝日新講座38)』朝日新聞社.
- 江澤譲爾 1944. 地政学の現況. 科学知識24(9): 19.
- 大木隆造 1941. 『政策学——ゲオポリティクの志向』青年書房.
- 大木隆造 1944a. ゲオポリティク及地理哲学への構想. 東亜
同文書院大学学術研究年報1: 241-296.
- 大木隆造 1944b. 『地理哲学への構想』理想社.
- 小川琢治 1924. 政治地理雑誌の新刊. 地球2: 84.
- 小川琢治 1928. 人文地理学の一科としての政治地理学. 地球9:
239-247.
- 香川貴志 2017. 学界展望 総説. 人文地理69: 304-307.
- 川西正鑑 1942a. 『東亜地政学の構想』実業之日本社.
- 川西正鑑 1942b. 『東亜地政学の対象と任務——大東亜共栄圏
建設の倫理的根拠の闡明』東亜新秩序研究会.
- 川原次吉郎 1927. 『政治学序説』松本書房.
- 川原次吉郎 1934. ゲオポリティクの概念. 法学新報44(8):
67-96.
- 川原次吉郎 1944. 政治学と地政学. 経済論纂34: 69-78.
- 木内信蔵 1941. (紹介及批評) D. Whittlesey: The Earth and the
State. 地理学評論17: 228-232.
- 小牧実繁 1940. 『日本地政学宣言』弘文堂書房.
- 小牧実繁 1942. 『日本地政学』大日本雄弁会講談社.
- 佐藤卓己・苅部直・米谷匡史2007. 座談会 思想の100年を
たどる (1) ——1921-45年 知の衝撃と再編成. 思想1000:
6-46.
- 佐藤弘 1944. 大東亜地政論. 江澤譲爾・国松久弥・佐藤弘『国
防地政論(国防経済学大系)』235-344. 巖松堂書店.
- 佐藤優 2016. 『現代の地政学』晶文社.
- 柴田陽一 2016. 『帝国日本と地政学——アジア・太平洋戦争
期における地理学者の思想と実践』清文堂出版.
- 柴田陽一 2017. 日本における詁語「地政学」の定着過程に関す
る試論. 現代思想45(18): 156-167.
- チェレーン, R. (阿部市五郎訳) 1941. 『地政治学論』科学主義
工業社.
- 戸所隆 2000. 人文地理学の課題. 地理学評論73A: 315.
- 日本青年外交協会研究部 1940. 訳序. ハウスホーフナー, K. (日
本青年外交協会研究部訳) 『太平洋地政治学——地理歴史
相互関係の研究 上巻』iii-iv. 日本青年外交協会出版部.
- 日本地政学協会編 1943. 『地政学論集』帝国書院.
- 日本地理学会 2018. 新ビジョン (中期目標) [[http://www.ajg.
or.jp/20180301/4251/](http://www.ajg.or.jp/20180301/4251/)]
- 春名展生 2015. 『人口・資源・領土——近代日本の外交思想
と国際政治学』千倉書房.
- 横田弘之 1942. 地政学の発展と其方向——翻訳地政学の反省
について. 興亜之工業7(7): 8-12.
- 吉村正 1933. ゲオポリティクの起源, 発達及本質. 早稲田
政治経済学雑誌30: 115-129.
- 吉村正 1941. 南方政策の地政治学的根拠. 改造23(16): 26-33.
- 吉村正 1942. 『地政学概説』廣文堂書店.
- 巖山政道 1941. ゲオポリティク. 中山伊知郎ほか編『社会
科学新辞典』101-109. 河出書房.
- 巖山政道 1948. 科学としての地政学の将来. 社会地理4: 2-6.
- 渡邊公太 2017. 日本語版刊行にあたって. スパイクマン, N. (渡
邊公太訳) 『スパイクマン地政学』1-3. 芙蓉書房出版.
- 渡辺光 1942. 地政学の内容に就いて. 地理学研究1(10): 1-14.
- 和辻哲郎 1935. 『風土——人間学的考察』岩波書店.